
クラゲと俺とドラゴン先生

真坂 哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラゲと俺とドラゴン先生

【Nコード】

N3632Z

【作者名】

真坂 哲也

【あらすじ】

クラゲと融合してしまったシンは、異世界に来ていた。ドラゴンに会ったり、モンスターと戦ったりしながら冒険するのです。

文章を書くのが始めてなので、解りにくい所もあると思いますが、よろしく願います。

第1話 ドラゴン先生そりゃないよ

俺は大学の研究の為にベニクラゲを採取しに漁船に乗って海に出た。

ベニクラゲ、別名「不老不死」のクラゲと言われる、ちなみに5mmくらいの大きさ。

ちょっとした肌の若返りの薬でもできれば、大儲け間違いなしだ！なんて思って研究課題としたのだ。

ベニクラゲを大量に採取して、帰ろうと思ったときエンジントラブルで潮に流され遭難してしまう、岸も見えなくなり、かなり沖を漂った拳句嵐に遭って光の渦に飲み込まれてしまったのである。

消え行く意識の中、体の細胞がバラバラになりベニクラゲと融合しながら溶けていった。

そう彼は異次元の世界に、魔法や怪物の住むファンタジーな世界に流れてしまったのだ。

「痛て〜」

なんだなんだと考えながら周りを見渡す俺、大きな岩山が見えるが後は天然林みたいだ。

確か海で嵐に……どう見ても森だよな……まあ生きてるしいいか。

目の前の物に目が留まる。

おっ……

あれ???

俺だよな???

しばらく眺める。

「ひいひいー俺が死んでる」

目の前には俺の死体があるよ。

ショックで放心状態……30分くらいたって死んだ俺をそろりそろり調べる。

つつん、くんくん、ポコポコ!? うむ、変な音だな、これは!!

<<検証結果>>

抜け殻だった……背中のに割れ目があり、中が空っぽだった。

「うおお〜、見てはいけない何かを今見てるぞ……たぶん」

セミの抜け殻みたいに……かなり肉とか付いてるけど……あう！まさか、俺ってセミだったのか、それとも蛇だったのか……しばらく考え……まあいいか、なんとかなるさと笑い。

<<結論>>

クラゲと融合したのは現実だったと決める。

ベニクラゲは老化現象が始まると、細胞が若返る現象がおきるが……正確には不老不死ではない、死んだら終わりだ……ベニクラゲ普通に魚に食われてるし。

ただ老化しないだけだから、たぶん今回は死ななかつただけ運がよかつたのだ。

俺の抜け殻を見ればわかる、生身なら全身打撲で死んでるのは間違いない。

体を見ると傷一つない、気がつかなかったがかなり若返ってた。

俺の抜け殻から服を取り着る、服がでかすぎだ……がーん、背が縮んでる、20歳から12歳くらいになってる……まあいいか一人だし。

落ち着いてまわりを見渡すと100m先の岩山の裾辺りに船を発見、船の中に食料や水などもあるはず。

「うやっほい〜」

叫びならダッシュする。

10mくらい岩山を駆け登り船を調べる、あるある非常食や水は無事だ、とりあえず助かった〜と水を飲みながら、これからどうするか考え、俺の抜け殻の墓を作ることにする。

船の中から掘れそうな物を持って岩山をさらに登り、眺めの良さ

そんな場所に墓を掘る、

「結構疲れるな……しかしホント不思議だよな〜」
とく俺の抜け殻を遠くから見る。

後は運んで埋めるだ……

「げえっ、なんだ、ひいひい〜」

食べられてます。

俺の抜け殻……森から虎や狼らしき化け物が出てがつがつと食べています。

ガクガク震えながら岩と岩の陰に身を隠して眺めてると。

ドカーン！

ビクっひい

ものすごい音が……

背後からドラゴンが現れく俺の抜け殻を丸のみ。

「さよならく俺の抜け殻を達者でな〜」

声が聞こえたのか？ドラゴンが振り返り、こちらに向かってくる。

やべ〜見つけた。

俺を見つけると目の前で止まり命令された。

「しばらく眠る その間ドラゴンの巣を守れ」

そう言い放つと岩山にあった大きな穴のに入って行くのだった。

「了解であります」

……無理ですが、戦死の覚悟をします。

なんてことだ、いきなり守れっていわれてもな〜正直生きていけるかもわからない。やばそうな猛獣いたしな、生き残れるのだろうか？。

サバイバルが始まった。

船の中を物色する、2Lのペットボトル10本、非常食約10日分、簡単な料理道具いろいろある。カセットコンロもあるがガスがすぐ尽きるだろう。操縦席の前には小さな部屋もあり寝泊りできそうだ。

家から背負ってきたバックパックに着替えやお泊りセットまである。船は小さな漁船だったので三角帆と大きな帆の屋根があり、ロープは沢山ある、屋根は改造して生簀いけすに雨水がたまる様にする。

人がいないか3日間探したが誰もいない……兎などの小動物がいるので狩を始める。

岩山の周りで狩をするが……無理。

「早すぎだぜ、絶対取れないな……そうか罨だな」

落とし穴や怪しい罨を大量に作り、棍棒を振り回しながら兎などを追い回す。たまに運良く罨にかかるのだ。

どうもドラゴンの巢の近くには猛獣いないみたいだ。初日に見たがそれ以外痕跡もない。ウサギの皮を剥ぎ取り肉を取り出す。実際にやると結構つらかったが、すぐになれた。

この毛皮で服でも作るか……とりあえず腰巻なるものを作った。

なかなかしつくりくる、気に入った、これは貴重なコレクションとして大切にしよう。服は大きくなったら着ようと大切にしまった。

サバイバル生活は薬草や食べれる木の実やキノコなどいろいろ知識が増えた。

なぜなら毎日怪しい木の実やキノコを食べ、毒にあたり、腹をくだし、痺れるなど、俺自身で人体実験を繰り返したからだ！！ウハハ。

その時俺は気がつかなかったが、あらゆる毒に対しての免疫がついていくのだった。さらに軽い怪我や傷は意識すれば、一瞬で治ることがわかった、きつとクラゲ効果だ。

1月が過ぎる頃には、原始人のような生活になっていた。

「うほっうほっほほっい」

軽快に走りながら叫ぶ、このウサギの原始人パンツは実にいい出来だ、と言いつつ聞かせながら、出来ればヒョウみたいな毛皮がほしいが、あんなのに出会ったらまず死ぬね。

棍棒片手に近場の森を探索していると、騎士らしき遺体を見つけた。

おお！！人がいるのか……一人ではないんだ……人に会えるかも知れない。喜びと、今までの変人な行動を見られたのではないかと焦り辺りの気配をさぐる。

「よし、誰もいないな」

周りに誰もいないのを確認し、遺体から武器や防具など装備品を手に入れた。

「お〜これがロングソードか」

と映画で見た、騎士の真似などしながら素振りをする。

「これで戦えるな、戦いたくないけど、ピンチにはなんとかなるはず」

この日から生活が変わった。

原始人を卒業したのだ。

それは人に会えるかもしれない希望。

運がよければ美人な女性なんかに出会えるかもしれない。

この妄想が日に日に巨大化して今では

「俺の名はシン、異界より着たり。ドラゴン先生の巣を守る勇者である」

と「万が一」人に出会った時のセリフを考えたりしてる。

1月前はドラゴンを見て恐怖に怯えていたが、ドラゴンに（先生）を付ける事で親近感をもたし、恐怖を克服したのだった。

さらに美女と同棲する可能性も考え、倒木を切り家作りや、柵を作る作業に没頭した。

夢のマイホームが出来そうな頃、まー倒木を蔓で結んで作った原始的な家だ、小屋のほうが正しいのか。

「まーこの作業も後数日で終わるな、次はベットだな」

と休憩していると背後で「がさがさ」と音がした。

ビクク!?

なれた手つきで剣を構え辺りを探る。

「俺の名は……!?!?」

なんだ犬か……小さな犬であるが、かわいくない

「やるのか、おお」

敵を威嚇し俺の縄張りを主張する。

襲ってくるのか、武器を構えてしばらく様子を見るがそうでもない。

ふっ脅かしやがって……と犬など無視して作業をすすめる。

夕方近くまた「がさがさ」と音がする。

ビツク……

剣を構えて待ち受ける。

また犬が現れ今度は、子豚みたいな獲物をくわえてのんきに歩いてる。

なんだあれば、うり坊か！？この周りで見たことがない。

実にうまそうだ、やるしかない。

俺は容赦なく犬に襲いかかりうり坊を略奪する。

「うめ~~~~この肉最高だわ」

と大満足しながら食べてると、物ほしそうな顔の犬が近くで見てる。

ふと略奪を思い出し、すまなそうに肉を半分投げると、がつつ食べていた。

「気に入った、よしお前を弟子にしてやろう」

と決めクロと名付けた、真っ黒な犬もどきだからだ。

同じような感じで 猫もどきも現れそいつはシロと名付けた。シロとクロはたまに小物をくわえて現れる。それを奪って料理し半分を返す、罠で取れた獣がいる時は分けてやったりした。

いつのまにかクロとシロが家に住み着き3人暮らしになっていた。

なんて偉いやつらだ、もう狩などしなくてすむかもなと喜び料理するのだった。

ある日クロとシロをよく見たら、狼と虎系の魔獣だとわかった。

きつとく俺の抜け殻を食べた、あの猛獣達の子共だろう……考えたら恐ろしかったが、仲間なら心強いと思い、かわいがる事にした、かわいくないけどね。

「愛があれば、言葉なんていらさないさ」

なんて考えながら剣の素振りをしていると、クロがからかう様にやってくる。

めちやめちや馬鹿にされてる感じだ、俺様にも我慢の限界があるぞ。

「よかろう、稽古をつけてやる。師が弟子を思つのも愛だああ」

と言い放ち棒切れをもって、襲い掛かる。

「いざ 勝負」

めっちゃめっちゃ素早い、棒切れは空をきるばかりだった。

この日から毎日の稽古は剣から木刀に変わり、クロヤシロと訓練するようになった。

人に会うことも一度も戦う事もなく、半年が過ぎた。

「クロ勝負じゃ」

叫びながら相手を探る、朝の稽古だ。

いきなり背後でドーンと音がする。

まさか……いやな予感がする落ち着いて振り返る。

ドラゴンの巢から、かなり小さくなったドラゴン先生が出てきたのだった。

「おい小僧、我が名はサンダードラゴン、今より契約を結ぶぞ……我が名を呼び 契約すると言え」

いきなり命令される。

「はい先生、ドラゴン先生と契約します、お願いします」

と返事をして怯えまくる、奴隷人生のはじまりか……終わった。

「よし契約はなった、では森のほうに行き我を召還してみよ 我が名を強く念じ呼び寄せるのだ」

「わかりました」

と叫びダツシュで森の奥に駆け込む、ミスったら確実に殺やっつけされる。

ドラゴン先生ここにきてくださいと強く念じ叫ぶ

「ドラゴン先生 来い!!」

ドガーン バチバチバチ（電気の音）

ドラゴン先生の回りの森が広範囲に吹っ飛び 稲妻が渦巻いている 大きさも初日見たよりでかい

「やっと 力を獲た…… 感謝するぞ小僧」

ドラゴン先生の話では、お前の抜け殻は高濃度の魔力の結晶であり、食べれば1ランク上の力が得られたが、なぜか細胞が若返りだした。

細胞の活性化が止まらずどんどん若返っていく、1000年以上生きていたドラゴン先生は役半年ほど若返りの時間が必要だったらしい。

若返りの原因がお前の魔力を見てわかったらしく、契約すれば若返りが止まり最高の状態の体になる事も予想できた。

簡単に話せば、60歳の人が若返り過ぎて5〜6歳子共になり、そのまま年を取らなくなってしまう。

原因の者と契約すれば若返りが能力のピークの時（20歳くらい）に安定するのだった。いつのまにか、俺の体も18歳くらいに戻っていた。

普通なら召還者はかなり高い能力を必要とするが俺の抜け殻を食べたので、その力がドラゴン先生に宿り、俺と共鳴してるらしい。

ドラゴン先生と契約はしたが、もちろん命令されるのは俺だ……しかも召還するのに、でかすぎて屋外でないと無理らしく、召還時サンダープレスなる物を発動するので、もし人や建物があれば吹き飛んでしまうだろう。

くだらない事でドラゴン先生を召還したら、激しく怒られ恐ろしくて召還できない事もわかった。

先生 結局……使えないじゃ……

第1話 ドラゴン先生そりゃないよ(後書き)

よろしくお願いします

第2話 隠れ家

ドラゴン先生の話ではシロとクロも俺の抜け殻を食べているらしく契約できるとの事だ。

俺は、我が弟子なら思う存分命令できると思い早速契約をした。

「クロ、シロ。召還」

クロは真っ黒い陽炎のような狼に、シロは真っ白い白虎になった。

「ほー、影狼に白虎か」

ドラゴン先生の話では、種族最強に近いらしく、普通召還出来る物ではなく、人になつく事もない。危険な魔物の名に入るらしい。

クロは見た目からやばそうだが、シロは見た目は堂々とした白虎だイメージ通りだ。

恐ろしいが、とりあえずシロから馴れていこうとシロの頭を撫でながら。

「クロ シロよろしくな」

と笑顔で挨拶。

「がお~~~~う」

シロが胸を張るように咆える。咆哮です……痺れて動けません。

(咆哮とは咆えて相手を威圧し麻痺させるスキルです)

謀反だ、明らかにわざとだろ油断したぜ。

正直、怖すぎて馴れるまで(咆哮とかも合わせて)にかなり時間がかかった。

次は騎乗の練習だ、馬に乗ったこともないのでひたすら練習だ。

最初はゆっくり歩いてもらいなんとか乗れる程度だったが、今では結構乗りこなせるようになった。

クロとシロを引きつれ森を探索するが魔物などさっぱりいない平和な森だ。

騎士の死体があった場所を重点に探す人に会えるかも知れないからだ。

シロの背中に乗り森を走っているとクロが突然走り出す。

「ぎゃーー」

遠くで女性の悲鳴が聞こえた。

ついに出会いキターとダッシュで現場に向かう。

クロの前に化け物がある。人型だがまさに狼だ、これが人獣なのか？

おびえてる様だが何かを叫んでる。仲間を読んでるのか……？

「女性をを何処にやった！」

！？
周りを探るが他に誰もいない……血痕もないから連れ去られたか

剣を構えて人獣を威嚇する、人獣は私の剣を見たとき力なく座
つて何かを言ってるが、さっぱりわからない……シロほえる！

「がおおおお」

突然の咆哮で気を失う人獣、船にあつたロープを取り出しグルグル
巻きにして逃げない様にし、周りを探索するが足取りがわからない、
ドラゴン先生のところへ連れて行くしかないか……先生なら言
葉がわかるかも知れない。クロが人獣を啜え、先生の所に戻る。

「ドラゴン先生……大変だああ……」

とあわてて走り込む……ハアハア

「女性がさらわれた、早く助けなければ……」

早口に状況を話す……大切な出会いなんだと真剣に。

めんどくさそうに振り返るドラゴン先生。

「言葉か、忘れておつたのう……ま……あわてるでない。その女を
起こせ」

女って……周りを見ながら人獣の事だとわかる、焦る俺……まさ
か勘違いか！？

ドラゴン先生が呪文を唱えてる、通訳の呪文らしい。

人獣を起こすと、ドラゴンを見て泣き叫けぶ。

「食べないでください。何でもしますから命だけは……」

「これで良からう、シン後は人狼と外で話せ」

言葉を理解した俺を確認し、弱みを握った様にニヤリと笑う。

外に連れ出し人狼と話す。

「お前な〜人狼つてのは、もつと、かわいらしくだな、耳がピコつてついて、もつと愛着が沸くものなんだよ。胸もでかくてだな。スタイルもよく、ぶつぶつぶつ……あああなんて事だ」

勝手に理想を話落ち込む俺……ああ君が悪いわけでないよ、判ってるこの世界に少し絶望したのだよ。

「もう家に帰っていいよ、君は自由だ!!」

かなり凹でる様で顔も見えてない、そんな俺に切羽詰った用に話かけてくる。

「あの仲間が死にそうなんです、お願いします。助けてください」

「どんな化け物に捕まったのだ？」
やる気ねーオーラがでまくりだ。

「化け物ではなく、病気なんです」

「はい！？何人くらいだ」

「20人ほど、急がなければ死んでしまいます。何でもしますので」

「分かった、助けよう。しかし君の命は今日から私がもらおうのか？、君の名前は」

「わかりました、私の名前はサラです」

見た感じ彼女はかなり強そうだ俺にはわかる、よく見ればワイルドな顔が怖すぎるぜ。恩を売れる時に売っとけ、この森で生き抜く為には護衛なかもがいなくてはな、最高の右腕になつてくれるだろう。

「俺はシンだ、一つ聞くが俺が行ったら間違えて食べられる、なんてないよな？」

「大丈夫です、動ける人はほとんどいませんし皆、女性です。ちゃんとピコって耳がついてる人もいますよ」

「なんだって〜、ゲフン、そうか、そうなんだ。サラは、戦闘系なのか？」

「やっぱいるんだ、出会いだ出会い、よかったぜ。」

「私はまだ生まれて若いのでランクが低いのです、上がればピコって耳になりますよ、戦闘は弱いですが……戦闘系ってなんですか？」

「サラにピコ言われてもまったく創造できないのだが。」

「なんだって！！戦闘できないのか……まあいい。ピコには何年かかるのだ？」

「周りの話しでは早くて10年とか平均30年かな？」

聞いた俺が馬鹿だった、その頃は死んでるさ。コックとして生きてもらうか、飯しだいか不器用そうだがまあ後で考えよう。

「ドラゴン先生に話してくる、その家に薬草があるので準備してくれ」

俺はドラゴン先生に助けに行くと話すと、この奥に水が沸いてるから、その水とく先生の抜け殻があるんでその肉を持っていけと……先生も脱皮したんですね……共鳴シンクロしたってこれですね。俺も化け物になったと思つたよ、分かる分かるよ。しかもく抜け殻、邪魔なのでくれるらしい。

ドラゴン先生の寢床から少し奥に行くとかなり広い空間があり冷える、冷蔵庫の中にいるようだ。

この部屋は半人口的で天井や壁の上部の隙間から光が入っている。広間の奥に大きな岩がありそこから水が湧き流れ出している、岩を伝い流れた水は水路にあつまり大小の水溜りを作り壁の奥に流れて行く様だった。

この広間に先生の抜け殻もある……生きてるようで恐ろしいが剣で内側から肉を少しそぎ取り、不思議な水もペットボトルに入れる、たぶん何かの効果があるのだる見た感じから怪しい、回復だろうな。2Lのペットボトル2本と肉3キロくらいをマストの帆だった布にくるみバックパックに詰め込む。

クロにサラを乗せ俺はシロにのる。

大体の場所を聞いて出発する、東側の岩山に沿って森の中を2時間近く走ると、見上げるばかりの断崖絶壁がある、そこらしい。近くまできても何処にあるか分からなかったが、サラが指差す場所に小さな洞穴がある。

「あれが隠れ家です」

入り口の近くに来ても人の気配がない、武器を手に警戒しながら中に入り周りを見渡す……絶句。

全員死にかけてます・・・獣人？やら見たことない人種？がいた。バックパックからペットボトルを取り出し、重症な人から少しづつ水を飲ませる。かなり楽になるのかうめき声などはなくなった、表情も落ち着いてきている。

よく見たらサラも苦しそうだ、水を飲まして。

「お前も寝ている」

薬草を探しにいく、胃腸薬系だ。思ったより重症だ、病人にいきなり強い薬は逆効果と昔本で読んだことがあるからだ。適当に薬草を取り戻り台所らしきところでドラゴンの肉をミンチにしてさらにつぶす。

これなら飲めるだろう……残ってた水との2Lの水に薬草を入れ、肉を小さじ半分くらい口に入れ水を飲まず。

全員の食事が終わる頃には暗くなっていた。顔色も良くなってるみたいだから安心して、あまった水と肉を置き。シロに洞窟を守っ

てもらおうことにしてドラゴンの巢に戻ることにした。

クロに乗って戻る、帰りは飛ばして1時間で着いた、今日の事を先生に話す。

「うむ上出来じゃ、あの人獣を見れば病だとはわかったが、そこまで酷かったのか、死臭もしてたしのう」

先生の話だと、普通ドラゴンの肉は鮮度が落ちない、栄養満点のめっちゃうまい肉だが、この抜け殻の肉は特別らしい。先生が調べて分かったのは、俺の抜け殻効果によく似てる。高濃度の魔力、能力UP、若返りや寿命効果、怪我や万病にも効果絶大。

先生も気が付かなかったもう一つ特別な効果がある。

それは、惚れ薬だ。

5〜6種類の薬草と混ぜ合わせると回復効果が上がるらしいので明日取って行くことにして準備する。
持っていくを取り水を10L用意、ついでに俺たちの食事もドラゴンの肉と決めたので肉15kgぐらいにした、シロとクロが大量に食べるから。

明け方から森に出て薬草を取り昼前には隠れ家についた。中から話し声が聞こえる。

「失礼しまーす」

中に入って超びっくる、座って話ししてるし中には歩いてる人も。

「「「あつ シン様 ありがとうございます」「」「」

全員感謝や尊敬の眼差しで深々と頭を下げる。

「ああ良かった、大分元気になりましたね。昼飯の材料持ってきたから皆で食べよう」

すごい回復に思わず胸をなでおろす。

少し照れながら逃げるように台所に向かう、感謝されるのに慣れ
てなくはずかしいのだ。

台所に行くとは絶句……

めっちゃめっちゃ美人な女性が出てきた……

「あ、シン様おはようございます」

「お、おはようございます」

ペコリと頭を下げる俺

「あ、緊張しなくていいですよ、サラです」

「ええええ~~~~~」

サラの話では、夜、体に変化があり能力がかなり上昇しランクアップしたらしい。めちゃかわいい……シルバーの髪に白い肌、三角の耳が頭のピコって付いてる、いや〜もう、縛ったりしてすいませんでした、神様に謝る。

サラに昨日の話を聞くと、昨夜遅くには容体がよくなったので、もう一度全員に軽く夜食を与え朝症状の重い人を優先に食べられるだけ与え残りを皆で当分で分けて食べたらしい。

バックパックから水を取り出し、泥棒袋の様にかついでた布袋からドラゴンの肉を取り出し適当な大きさに切り薬草をすり込む。ミンチにしようと思ってたがすっかり食欲も回復してるみたいだから飲み込みやすい大きさに切ることにした。味見したらめっちゃ美味しいシロとクロにもお裾わけして、あまつたら山分けだぞつと約束する。

「よしゃ〜飯できた 腹一杯食べてくれ」

皆の所へ持つていく……食べる食べる、あの病人だったよね？ 15kgが見事になりました。

人獣達すげー！！

「シン様、お話があります」

サラは意を決した様な顔で話しかけてきた。

サラの話では1年前、帝国がドラゴン討伐の為 大規模な兵をだしてこの森に進軍した。

結果は散々たる敗北で軍は尻尾を巻いて逃げたらしい。ドラゴン

討伐の為、多くの奴隷が借り出され、その中にサラ達もいたのだ。男達は前線に借り出され、戦えない女や老人などは食料や資材を運ぶ役目に回された。

サラ達が前線のキャンプに着いた時ドラゴンの襲撃に出会い、勇敢に戦った者は全滅し貴族や将軍達は皆我先に逃げ出してしまった。残された奴隷たちは何とか助け合い戦場を逃れそれぞれの故郷や主人の元に帰っていき、帰りたくない者や怪我をして動けない者だけが残ったらしい……。

そして、今の隠れ家を見つけ、ドラゴンから隠れる様に暮らしていたが、数日前から原因不明の病にかかりあつと言う間に全員感染してしまったのだ。今回シン様に助けられ皆覚悟を決めたらしい、脱走兵として国に突き出せばそれなりの褒美が出るし、ドラゴンの生贄として出してもかまわないと。

そんな事しないから、大丈夫ですと話すが信じてくれない……結局こちらの身の上話もした。難しい所は記憶喪失って事で、ドラゴンの巢を守っている事や帝国の人間ではない事。

「では その剣は？」

拾った……この剣が帝国の騎士の紋章があり帝国の人間だと思われたみたいだ。それならシン様の奴隷になると言っただけさん聞かない。サラはいい、その他はだめだ……！

「ドラゴン先生に聞いて許しが出たらいいよ」

と話その場は去った、先生も嫌がるはずだ間違いない……！

家に帰って、早速先生に聞くと

「お前の奴隷だろ、好きにしろと」
ってマジですか!?

困った、俺は見たのだ。たしかにピコっついてた、しかしもう、おばあちゃん、いや老婆だ。考えて見てくれ、ガリガリに痩せて病気の老婆が生肉にくらいつく姿を……背中に冷たい汗が流れる。

エロレベルで話すと、俺の最大でも熟女までた。これでもかなり厳しいのだが、あれは完熟を通り越して干しブトウ? いや干婆だ………しつけの厳しいご老人達が、俺とサラの愛の生活に邪魔をするはずだ。

黙って見てるはずがない……こんなジャングルで礼儀やしつけなんて真つ平だ。

鼻がよく効くやつらの前で臭い屁を出すのは聞きそうだな。まずはこれで行くか。

断る言い訳を100個ほど考え俺は寝た。

第2話 隠れ家（後書き）

よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3632z/>

クラゲと俺とドラゴン先生

2011年12月13日10時50分発行